

-- “Kābul” について (雑誌紹介) --

阿部尚史

2001年の同時多発テロの後にアメリカが「テロとの戦い」を標榜してアフガニスタンに派兵・軍事介入してから、はや10年以上が経つ。現在国際社会の支援を受けながら同国を統治するカルザイ政権は、政権内部における汚職問題や行政の非効率、国民の不満（反米世論も含む）という「内憂」に加え、ターリバーン勢力との終わりの見えない抗争という「外患」を抱え、行き詰まりを見せている。

現在では主として「支援」の対象としてしか注目されないアフガニスタンだが、パーミヤーンに代表されるような仏教関連遺跡が存在することはよく知られている。また中央アジア、西アジア、インドの接点にあることから、アフガニスタン各地には特徴ある文化が育まれてきた。この地域では、歴史的にはダリー語（アフガニスタンのペルシャ語）が共通語として用いられてきた。西部の中心都市ヘラートは、15, 16世紀にはペルシャ語文化圏の中心地として繁栄を極め、当時この都市を支配していたティムール朝になぞらえて、「ティムール朝ルネサンス」の中心と目されていた。

このように、アフガニスタンは現在の混乱状況とは別に、優れた文化的土壌を有している。1979年の当時のソビエト連邦によるアフガニスタン侵攻以前は、立憲君主制・共和制のもとで西洋近代的な諸制度を取り入れながら、学術・文化の発展が続いていた。

20世紀前半のアフガニスタンの文化水準を示す一つの例が、ここで取り上げる1931年創刊の月刊学術誌である『カーブル』誌 *majalla-i Kābul* である。本誌は、主としてダリー語で記されている（パシュトゥー語で記されている論文・文学作品なども時に掲載されている）。アジア経済研究所図書館は、第二次大戦前、アフガニスタンに農業技官として3年間派遣された故尾崎三雄氏のご遺族により寄贈され、この『カーブル』誌を所蔵することになった。まとまった形で本誌の現物を所蔵している機関は、国内ではアジア経済研究所が我が国で唯一と思われるが、（第2年度から第11年度まで。一部欠落あり）マイクロフィルム版については、京都大学 地域研究統合情報センターが1931年から1982年まで所蔵している。なお、この雑誌は、現在アフガニスタン研究を積極的に進めているニューヨーク大学のもつ「アフガニスタン電子図書館」（<http://afghanistandl.nyu.edu/about.html>）のなかにも含まれていない。したがって、本誌は、インターネットを通じて容易に閲覧できるものではなく大変貴重な資料であり、アジア経済研究所図書館の重要なコレクションといえることができる。

当雑誌刊行の時期は、20世紀初頭にアフガニスタンにおいて国民国家建設が本格的に開始された時期とも重なるが、このことは重要な意味を持っている。この雑誌の発行元は、「文学アカデミー」 *anjuman-i adabī* である。初年度分が欠落しているため残念ながら刊行の動機

を直接知ることはできないが、第二年度の第一号冒頭の言葉や巻頭論文を見ると、

- ・国民の啓蒙と近代化（西洋近代的合理主義の導入）
- ・アフガニスタンの古典文化・文学および歴史や同国の名士の再評価
- ・現代（ダリー語）文学の発展と、パシュトゥー文学の普及

といった志向が読み取れる。また、ほぼ毎年、第 3 号目に独立記念日に関連した記事があり、その中で独立国の誇りと喜びを表明している（第 2 年度は、独立 14 周年）。こうした点を見ると、1930 年代初め、まだ独立後間もないアフガニスタン王国は、国民国家としてアフガニスタンの文化を定義し、それを発展させることを意図して、本誌を出版していたといえるだろう。またイラストも掲載されており、その中には国王の写真をはじめ、モスクや自然景観、新しい行政施設の写真など、当時のアフガニスタンのイメージを提供してくれる。本誌はおよそ 80 年前の雑誌とは思えないほど紙質が良く、出版には政府による積極的な財政的な支援があったことをうかがわせる。

個々の論説を見ると、ダリー文学、パシュトゥー文学、アフガニスタンの歴史・文化、インドとの関係、西ヨーロッパの思想文化、翻訳、また当時のアフガニスタンの現状（行政組織）に関するものなど多彩な内容を含んでいる。また年を経るにつれて、徐々にアフガニスタン各地の社会状況・文化・文芸の紹介を取り扱う論説が見られるようになり、地方の特色を紹介する余裕が生まれてきたことが分かる。ただ、ざっと各号をめくった限りでは、アフガニスタンの名士としてイスラーム法学者やアフガーニーを紹介する論説はあるものの、宗教としてのイスラームやイスラーム法に関する論説はごくわずかしか見られないことに気づく。この点については、当時のアフガニスタン王国の近代化政策、文化政策とも関連していると思われ、興味深い点である。

『カーブル』に掲載されている個々の論文・論説は、20 世紀前半当時のアフガニスタンを知り、国民国家形成研究という視点から読み込むならば大変有効な資料といえるだろう。これは、—現在の復興支援がある程度順調に進むことを期待した上ではあるが—今後のアフガニスタンの国民統合の行方と比較するためにも重要な研究題材を提供してくれていると思われる。アフガニスタンに関心を寄せる方々の積極的な利用を期待したい。

（日本学術振興会特別研究員・アジア経済研究所国内客員）